川崎医会誌一般教，24号：75—90(1998)

ヨハネ「福音書」9-10章の構成

—ヨハネ「福音書」9-10章における術語ラレイン [I-1]—

川崎医療福祉大学　共通科目担当

佐々木　寛　治

(平成10年11月4日受理)

Der Aufbau der Joh 9-10

—Die Terminologie λαλεῖν in der Joh 9-10 [I-1]—

Kanji SASAKI

Beauftragte mit allgemeinbildenden Fächern,
Kawasaki Universität von Medizinischer Fürsorge
Kuraschiki, 701-0193, Japan
(Received on November 4 1998)

概　　要

父と子の一致の位相が「同一性」(10,30)ないし「相互内在」(10,38)という最高で究極の規定を与えられたとき，ひとつの長大な物語が終結する。イエスのある言明のうちに「ユダヤ人」たちは彼が神と自己との関係を「相等性」と規定するという神冒瀆を聞き取った。このときイエスは答えて言われた：父がされることをみてそのことをする以外には子は自分からは何もできない(5,19c)。イエスは「相等性」という最初の直接性を分割されたのであり，この相違という否定性がひとつの物語のポテンシャリティとなったのである。その物語の主人公としてイエスは未来終末論の生活世界へ降下され始めた。物語は10,30ないし10,38で最後の直接性＝家郷へと還帰する。ここで「教会」は現在終末論の意味での「見ることかつ聞くこと」の生誕を受ける。

Resümee

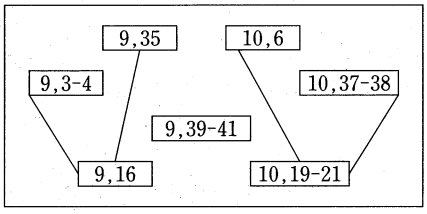
Eine ziemlich lange Erzählung endet sich mit der höchsten und letzten Bestimmung über die Phase der Übereinstimmung des Sohns mit dem Vater :„ die Einheit "(10,30) oder„ das Ineinander "(10,38). In einer Aussage Jesu fanden„ die Juden "eine Blasphemie, seine Beziehung mit dem Gott als„ die Gleichheit "zu bestimmen. Und dann antwortete Jesus und sprach zu ihm: Der Sohn kann nichts von sich aus tun, sondern nur, was er den Vater tun sieht(5,19c). Er teilte die erste Unmittelbahrkeit als„ die Gleichheit "ab, und die Negativität dieser Differenz machte die *Potentiality* in einer Erzählung aus. Als der Hauptgestalt begann Jesus in die Lebenswelt der futurischen Eschatologie unterzugehen. Diese Erzählung kehrt in ihre endliche Unmittelbahrkeit (=Heimat) in 10,30 od.10,38 zurück. Hier bekommt DIE KIRHE die Geburt des SEHEN UND HÖRENS im Sinne der präsentischen Eschatologie

第1章　ギリシャ文字 ω の結構

第1節

ヨハネ「福音書」9章の最初の小単位は盲目で生まれた人の治癒物語，10章のそれは羊の囲いのたとえ *παροιμία* である。後者は，羊飼いは羊の囲いに門から入り，羊たちは彼の声を聞き取るのだという比喩説話 (Bildrede) である。9章語り初めの物語のテーマは「見ること」であり，10章のそれは「聞くこと」である。こうしてみると両章は「見ること」，「聞くこと」の鮮やかな対比のうちに始まっていることがわかる。この対比がすでに，5章での終末論的な「聞くこと」の強調 (5, 24-29)，6章での同じく終末論的な「見ること」の強調 (6,34-40) を読者に思い出させるのである (9-10章は繰り返し繰り返しテキストの前方を想起させて止まない)。

「見ること」と「聞くこと」はテキストの中央9,35-10,6で交差している。この範囲は9-10章全体の山項――火口 (9,39-41) を抱えた山項――である。



われわれは，この山項の風光は後から少しずつ見ていくとして，今は先ず，この山項が深い溪谷によって挟まれていて (9,16と10,19-21との二つの分裂 *σχίσμα*)，9-10章全体がギリシア文字 ω の結構を示していること，このことを指摘しておきたい。文字 ω の最初の打ち込みと最後のハネ上げは，次のように〈父の業を行う〉というテーマで平行している (父の業，イエスの言葉，それが分裂 *σχίσμα* をもたらす)。

〈打ち込み部〉

9:3イエスはお答えになった。「本人が罪を犯したからでも，両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである。9:4わたしたちは，わたしをお遣わしになった方の業を，まだ日のあるうちに行わねばならない。

〈ハネ上げ部〉

10:37もし，わたしが父の業を行っていないのであれば，わたしを信じなくてもよい。

10:38しかし，行っているのであれば，わたしを信じなくても，その業を信じなさい。

そうすれば，父がわたしの内におられ，わたしが父の内にいることを，あなたたちは知り，また悟るだろう。」

上の図に関し，「頂上」部を A(9,35-38)，B(9,39-41)，A'(10,1-6) と分節したうえで，この部分について三点だけ述べておきたい。第一に，上図「頂上」部の先頭と末尾 (9,37と10,6) に動詞 *λαλεῖν* が記述されていることについて。そもそもヨハネ「福音書」は，*λαλεῖν* という

動詞が音を強調していること（「語る」という行為を表す同義語の中で，ひときわ顕著に〈音が出ているという契機〉を突出させていること）に鋭く注目し，この特性に沿って，この動詞を使用している。全59の用例のどれをとってみても，練りに練った精密な考量に基づいて配置されていることがわかる。「項上」部全体が λαλεῖν という動詞によって枠づけられているという事実によって，われわれはこの項上が，象徴次元で，ある「音・声」によって支配されていることを知らしめられるのである。

第二に，この音が支配する項上に「火口」が口を開けていることに関して。「ファリサイ派の人たち」はこの音を「聞き取れなかった」と地の文は報告するが10,6，これが直ちに直前9,39-41の「君たちは見えはしない」というイエスの強い断罪口調と暗く共鳴し合うことになり，読者は――まるでモーセが語り終わるとすぐにコラ，ダタン，アビラムの住まいの周りの大地が口を開いたこと（民数記23-35）を想わせるように――「ファリサイ派の人たち」がすでに裁かれたこと，闇に入ってしまったこと，を恐怖感と共に想像せざるを得ないのである[1]（この裁きは，イエスによって癒やされたあの人の証の言葉を会堂追放をもって断罪した9,40-41，「ユダヤ人たち」の裁きが呼び込んだ当のものなのである[2]）。

第三にA部，B部，A′部の，この三単位のつながりがぎこちない点について。多くの解釈者を悩ませてきたところであるが，われわれはB部は，前後との関係の取り方の形式的に可能な四種類の機能を全て持たされていて，「聞く」，「見る」，「裁く」，「裁かれる」，「生」，「死」，「光」，「闇」，「音」，「沈黙」の諸テーマを立体的かつ祝祭的に交差させ乱舞させている極めて秀逸なレトリックであると解する（当時の地中海文学に類似の例が見出されれば，ひとは感嘆しつつもさもありなんと思うことであろう）。[1]テキストの流れに沿ってB部はA部と結合する――このときB部の「見る」はA部を跳び越えて前方の治癒物語と結合し，「見える・見えない」の意味の重大な転倒が実現する。[2] 9章と10章の壁を越えてB部はA′部と結合する――このときB部の「見る」，むしろ9章全体の「見る」はA′の内容を「見る」かどうかの問題へと集中する（ちょうど焦点に全ての光が注ぎ込まれるように）。[3]ヨハネ版サンドウィッチ方式[3]の一形態として，a)外枠A-A′の結合が前景に出るときB部は事態の進行の背後で生じた裁きとして後景に退く――このときA部の「声」はB部を跳び越えてA′部の「声・聞く」と強く結合する。そして翻って9章内部に書き込まれていた「声・聞く・言葉」の内容がA'部のエコーの様にして浮き上がってくる。他方b) B部が前景に出てるときA-A′の外枠が背景に退く――このとき，B部の「ユダヤ人たち」（の9,40-41における裁き）に対するイエスによる裁きがA′部を跳び越え，「たとえ解釈部」からソロモンの回廊での対決へと熾烈さを増して，あたかも稲妻のようにして突き進んでいく。その結果，10,31.39における「ユダヤ人たち」によるイエスに対する裁きが，実はB部から噴出し始めるイエスによる裁きの流れへの旧秩序側からの大規模な反動であることが歴然とするに至る。

読者はそのときそのときの読解の様態によって上記四つの可能性のうちのどれかひとつに，――若い女性と老婆のどちらかを交替的に見せるあの有名な重ね絵を見るときのように――自

分の自覚的意志の統御とは無関係に巻き込まれて，読み進んでいくことになる。

第2節

次にテキスト上で，われわれの対象範囲を包んでいるコンテキストを見ておこう。9-10章全体を表示する文字 ω の先頭の打ち込み部は「世の光」をめぐる記述を含んでいて11章冒頭の「世の光」記述に明確に対応している（このことがまた，9-10章がひとまとまりをなしていることの裏付けとなる)。ヨハネ「福音書」全体では「世の光」記述は

LW1(1,4-5.9)，LW2(3,19-21)，

LW3(8,12)，LW4(9,4)，LW5(11,9-10)，LW6(12,35-36)，LW7(12,44-46)

の7回ある。この「福音書」は8章からイエスの上昇退去の道の叙述に入るが，その入り口にLW3が，またその最初の出口，つまり地上のイエスの公的活動終結部にLW7が記されている。この両箇所では「光」の前で「闇」は〈何ものでもない〉——因みに下の引用文中ἐλάλησεν ならびにἔκραξεν καί εἶπεν は，ヨハネの用語法から見れば，ともに権威ある「音」が語りの中に鳴り響いたということが明示されているという意味で，ほぼ同義なのである。

LW 3：[8:12]イエスは再び言われたἐλάλησεν。「わたしは世の光である。
わたしに従う者は暗闇の中を歩かず，命の光を持つ。」

LW 7：[12:44]イエスは叫んで，こう言われた δὲ ἔκραξεν και εἶπεν。「わたしを信じる者は，わたしを信じるのではなくて，わたしを遣わされた方を信じるのである。[12:45]わたしを見る者は，わたしを遣わされた方を見るのであるὁ θεωρῶν ἐμὲ θεωρεῖ τὸν πέμψαντά με。[12:46]わたしは光として世に来た。わたしを信じる者が，だれも暗闇の中にとどまることのないように。

この枠に挟まれたLW4～LW6においては「光」は「闇」に脅かされ圧倒されているのである（LW1を一日目の光，LW4を四日目の光とヨハネは考えているのかも知れない)。

LW 4：[9:4]わたしたちは，わたしをお遣わしになった方の業を，まだ日のあるうちに行わねばならない。だれも働くことのできない夜が来る。[9:5]わたしは，世にいる間，世の光である。」

LW 5：[11:9]イエスはお答えになった。「昼間は十二時間あるではないか。昼のうちに歩けば，つまずくことはない。この世の光を見ているからだὅτι τὸ φῶς τοῦ κόσμου τούτου βλέπει·。
[11:10]しかし，夜歩けば，つまずく。その人の内に光がないからである。」

LW 6：[12:35]イエスは言われた。「光は，いましばらく，あなたがたの間にある。暗闇に追いつかれないように，光のあるうちに歩きなさい。暗闇の中を歩く者は，自分がどこへ行くのか分からない。
[12:36]あなた方が光を持っているうちに，光を信じなさい，光の子となるために。」

枠をなす二つの「光」はいわば永遠不滅の栄光である。しかし，枠に挟まれた三

つの「光」は残された時間だけが頼りの，死に切迫され闇に圧迫された存在でしかない。後者に属する二つの「光」叙述 LW4と LW5とによってわれわれの9-10章は挟まれている。

このようにしてテキストは読者に，LW3のいわば永遠不滅の「世の光」ではなく，「闇」に脅かされ背中を押されて足もとも危うくさえなった「世の光」，そういう意味での主人公・人の子と共に，呼び寄せる暗黒の死へ向けて歩み出すことを要求しているのである。逆に言えば，「闇」に脅かされた「世の光」の物語に巻き込まれ錐揉まれてしまう読解を十全に潜り抜けることなしでは，読者は決して LW7に摑まれることはあり得ないのである (LW7の光を「見る」は *θεωρεῖν* であり，LW5の光を「見る」は *βλέπειν* であることに注意せよ！なお，LW3と LW7のように同じ表現をヨハネが記述するとき，それはこの表現の内容が決定的に転換されていることを同時に示しているのだということを忘れてはならない)。

たんなる LW3では無時間であって物語を推進するポテンシャリティは存在しない。LW3がLW4～LW6によって媒介されるということではじめて物語が動き始める。そして物語の進展方向は LW7の新たな直接性への還帰を目指しているのである。こうしてわれわれは LW4と LW5の間に身を入れようとする今，物語の語り手と聞き手とを共に巻き込み呑み込み，死と生の揺らぎのうちに激しく流れていく，暗い物語時間の河に足を入れようとしているのである。

第３節

他方で，9-10章全体を表示する文字 ω の最後のハネ上げ部の方では，「父と子の一致 Übereinstimmung」のテーマが高々と語り出されていて，それが「父と子の一体 Einheit」と「父と子の相互内在 Ineinander」という二重の形式で謳い上げられている。

10:30　わたしと父とは一つである *ἐγὼ καί ὁ πατὴρ ἕν ἐσμεν*。

10:38bβ　あなたたちが知るにいたり知りつづけるために，わたしの内に父が，そしてわたしが父の内にあることを。

ἵνα γνῶτε καί γινώσκητε ὅτι ἐν ἐμοι ὁ πατὴρ κἀγὼ ἐν τῷ πατρί.

ヨハネの物語においては，イエスがその言葉において「父と子の一致」を今この場に現出されたという出来事，イエスのこの現在終末論的言語行為こそが，「ユダヤ人」たちの確信の「腹を突き刺し」，彼らを激怒させたのである。「父と子の一致」が許されないのは，それによって「人間」が神に媒介される，恵みの道が打ち拓かれたからである。律法から外れた罪そのものの如き「人間」をイエスの言明が神へと導き，「アブラハムの子」(8,39) たる自分たちの存在を無に等しいものとしてしまうからである。彼らには，「人間」と神との絶対的な断絶こそが(選ばれた者としての) その存在理由となっているのである。この断絶を媒介する者は，神の神聖

性を汚す者として滅ぼされなければならないのである。イエスがついに，「父と子の一致」のテーマを上のような強力な形式へと凝縮して突き出されたからには，イエスと「ユダヤ人」たちの直接対決はそのクライマックスに登り詰めたのであり，物語の筋としてはもはや全面的項点的対決の爆発とカタストロフィー（11-12章）しか残されていないことになる。

ところで「父と子の一致」のテーマは5章では，「父と子の相等 Gleichheit」という形式の下に次のように記されていた。物語はこの端緒＝家郷へと帰還するようにして10章末尾まで展開したのである。

5:17イエスはお答えになった。「わたしの父は今もなお働いておられる。だから，わたしも働くのだ。」
5:18このために，ユダヤ人たちは，ますますイエスを殺そうと求めるようになった。イエスが安息日を破るだけでなく，神を御自分の父と呼んで，自身を造りなしたからである，神と等しいと。
πατέρα ἴδιον ἔλεγεν τὸν θεόν ἴσον ἑαυτὸν ποιῶν τῷ θεῷ

5,17-18を最初に目にした読者は，両者の直接対決がこれほど完璧に突出してしまっていて物語はどう展開できるだろうかと訝るはずである。見られるようにここには，「世の光」記述をめぐり，端緒 LW3と終結 LW7の二つの直接性について生じていたこととちょうど同じ事柄が，もっと大規模にそして深刻に，発生しているのである。

因みにわれわれは5章を「A：しるし Zeichen V1-18」，「B：イエス項 Jesus Hälfte V19-30」，「C：ヨハネ項 Johannes Hälfte V31-47」と区分するが，「B: イエス項」の叙述によって，物語の展開の余地が開けられ，物語時間が徐々に創出されていくのである。

この段落の冒頭と末尾はつぎのように鮮明に平行している。

冒頭 5:19子は自分自身からは*ἀφ' ἑαυτοῦ*何もできない，父のなさるのを見なければ*ἐὰν μή τι βλέπῃ*。なぜなら父がなさること，そのことを子もそのとおりにしているのだからである。

末尾 5:30わたしは自分自身からは*ἀπ' ἐμαυτου* 何もできない。父から聞くままに裁く *καθὼς ἀκούω κρίνω*。わたしの裁きは正しい。
というのも，わたしは自分の意志をではなく，わたしをお遣わしになった方の意志を求めているのだからである。

この段落は子が父を「見ること」で始まり「聞くこと」で締めくくられている訳であるが，ここに読みとるべき第一のことは――まるで「ユダヤ人」側からの『二神並立そのものではないか！』という攻撃から自らを防御するかのように――〈子は父の影にすぎない〉ことが強調されているということである。このことで物語り時間の展開する余地が開けられ，5-10章の物語のポテンシャリティはまことに単純に設定されたのである。「父と子の一致」という軌道の上，読者の「知ること」のうちで，子が影のような存在から「ユダヤ人」への対立を深めつつ

その輪郭をますます「公然と」獲得してゆき，やがて父との一体，相互内在の定式にまで登り詰めるに至るという形成力，これである。物語時間は人の子が「ユダヤ人」との対立をどう深め，「父との一致」がどう明らかになったかをメルクマールにして進行していくのである。

――なお，上下の枠部分を構成している「自分自身から」は，ヨハネ神学の根本をなすところの，〈自分から〉の〈神から〉への転倒という方向線に関連する確立された術語である。5,19も5,30も明確に〈自分からではなく神から〉という神に対するイエスの服従の完璧性を語るものであり，その意味で，この段落は極端な消極性の外観の下で，実質は極めて積極的な内容に充満しているのである（この意味からは，物語展開はこの凝縮した充満の拡大展開ともいえるのである）。

そしてまた，上の段落を子細に読むことで第二に理解されることは，ヨハネは読者に〈上からのアナロギア〉を勧めているということである。その生活世界のなかの「知ること」において，読者にとって「先なるもの」とは（聖書が語る）天なる神・父であるが，それとのアナロギアにおいて地なる子を推論せよとヨハネはいうのである[4]。それは読者の信仰の枠組みを尊重するという協調の原則に則るものと言えよう（この方法はこの枠組みそのものを読者が自ら解体的発見的に転倒することを促進するためにテキストが不可避的に要求する戦略に基づいている）。この枠組みを尊重する限り，読者にとって「後なるもの」である子は不可避的に，「先なるもの」である父の影であらざるを得ないわけである。

第三に読みとるべきことは，読者の信仰枠組みに依拠しこれに協調することを（さしあたりの）原則とする限り，物語の上では最初は，子は人の子として未来終末論の地平に立つことになり，その際「父と子の相等」は，空間的には「天」での事柄としてそこに位置する。物語は人の子が未来終末論が沈殿した生活世界へと降下していくことから開始していくことになる。6章に濃密な未来終末論が語られているが[5]，それは以上のような物語時間の創出という観点から必然化したものであるとわれわれは考える。6章・7章で人の子の降下はもっとも深部に至る。逆に人の子・イエスの上昇の道が（予告を含めて）始まっていく7章・8章・9章は，未来終末論の外皮が取り除かれ，現在終末論がその力を発揮していく過程である。そして物語が10章末尾で〈下からのアナロギア〉の第一の帰結である「父と子の一体」へ登り詰めたとき，「父と子の一致」のテーマは現在終末論における現在直下の一致が示現する段階にまで到達したのである。この過程で人の子・イエスは降下上昇の道を辿り抜かれたが，その歩みに即して読者も，〈上からのアナロギア〉からはじまり〈下からのアナロギア〉をもって終結する読解の旅路を踏破したのである。

次の叙述は人の子が，その言葉において，未来終末論の支配する地平へと降下し始め，物語時間が始まろうとしていることを示すものである。

[5:24]はっきり言っておく。わたしの言葉を聞いて，わたしをお遣わしになった方を信じる者は，

1] 永遠の命を得ている，

また，裁きに来ることなく，

死から命へと移ってしまっている。

5:25はっきり言っておく。2］時が来る，今やその時である*ἔρχεται ὥρα καὶ νῦν ἐστιν*，

死んだ者が神の子の声を聞き，

聞いた者は生きるだろうところの。

5:26なぜなら父は，御自身の内に命を持っておられるように，

子にも与えられたからである，自身の内に命を持つことを。

5:27また，子に与えられた，裁きを行う権能を。

子は人の子だからである。

5:28驚いてはならない。3］時が来る*ἔρχεται ὥρα ἐν*，

墓の中にいる者が皆，彼の声を聞き，5:29そして出てくるであろうところの

善を行った者は復活して命を受けるために，

悪を行った者は復活して裁きを受けるため。

同一内容を異様に反復するこのテキストは，しかしその三段叙述において，1］現在終末論，2］未来終末論＋現在終末論，3］未来終末論と，歩一歩と着実に未来終末論が支配する読者の生活世界へ下っていき，いよいよこの次元で物語が開始していくのである[6]。

おそらくここは申命記のA：聞く(聞きなさいの変形，戒め)，B：永遠の命の授与(祝福)，B'：裁き(呪い)という三項組が下敷きにされているのであろう（この三項は，上記引用文各行の高さに対応)。いずれにせよここにイエスの言葉ないし声について，聞け・命・裁きの三項組が三回反復されている。それは預言者ヨハネが語る，御子を信じよの言葉の二肢性の展開であろう。

3:36御子を信じる人は永遠の命を得ているが，

御子に従わない者は，命にあずかることがないばかりか，神の怒りがその上にとどまる。

上のイエスの「言葉」，神の子・人の子の「声」の三段叙述は，10章の「声」，「聞く」へと継承されるのである。拙論『聞く』第1章第2節参照。

「父と子の一致」というテーマは無時間のたんなる思想内容なのではなかった。このテーマにおいて御子の言葉が「人間」を神に媒介することが提示されるが故に，それは「ユダヤ人」たちの確信の根幹を攻撃するものであり，彼らの反撃を呼び込むものであった。そしてこのテーマが強力な定式へと打ち固められる過程とは，とりもなおさず，地上での父・子・信ずる者たちの，霊における現在的一致が顕現・示現すること（ないし，それが知られるに至りかつ知られ続けること）に到達する過程だったのである（その意味で9-10章は教会論そのものである)。それは同時に，読者が依拠している未来終末論の枠組みを(ここへ物語全体がまず下降し

たことによってその中に巻き込まれた読者もろともに）止揚する結果を，原理的には，もたらしたのである。

第２章　両章の内部編成

第１節

９章の内部編成の整理についてはＪ・Ｌ・マーティンの指摘に学んだところが多いので彼の議論の立て方を承けてわれわれの結論を提示することにする。彼はヨハネ「福音書」研究に編集史的方法による分析を導入した記念碑的な論文[7]で，その第１部第１章を「一文学的分析」のタイトルをもって開始している。それは彼が，「第四福音書著者」（以下，われわれはヨハネと呼ぶ）の――「福音書」９章の構成の仕方に際立って表現されている――芸術センス溢れる編集手腕の見事さを明らかにしたいからである。

マーティンが指摘しているヨハネの手腕とはまず差し当たり９章冒頭の叙述に窺われるものである。そこではほんのわずかの伝承物語が核として提示され，それをドラマ的に展開するものとして新しい創作物語が巧みに接合されている。彼がヨハネを秀逸なドラマ作家であると褒めそやすのも，上のような編集的接合によって，〈イエスの時とヨハネ共同体の時との二重のドラマを表現する〉というヨハネの文体の特徴が鮮やかに提示されるからこそなのである。われわれもまた，ヨハネ「福音書」が一方で「福音書」として地上のイエスを物語るものでありつつ，他方でヨハネの時代の迫害と苦難の現実を語るものでもあることを認める。のみならずヨハネの文面上にこの〈時の二重化〉を嗅ぎ分け指摘しその内容を掘り下げていくマーティンの個々の作業を，われわれは敬意をもって踏まえているしこれを継承したく思っている。

さて９章７節から８節への転回のなかにヨハネの接合の手をマーティンは目撃する。
先ず彼はブルトマンとともに，そもそも福音書におけるイエスの癒やしの奇跡物語は定型的には１．病気の説明，２．癒やしの業，３．奇跡の確証という三つの要素を具えたものであることを確認する。V1-7に記述された内容の文学的様式は上の定型要素のうち第１ならびに第２と同型であると彼は見立てたうえで，それではV8-9は定型要素第３に相当するかと問う。確かに，とマーティンは言う，癒やしの奇跡が現実に起きたということを隣人が証している以上は「奇跡の確証」としての第３要素の記述のようにみえはする。しかし次の三点からしてV8-9をそのように処理するのは間違いである，と彼は述べる。

> 8-9の両節は必要不可欠な登場人物群としてそれまでは言及されもしなかった人々，つまり盲人の隣人たちを登場させている。両節は明らかに新しい場面を開始しているのであって，そこではイエスはもはや存在することはないのである。この両節では注意はイエスにではなく，以前に盲目であった男に集められ始めるのである(25)。

確かにマーティンも（同頁注12で）言うように，癒やしの奇跡は「癒やされた人にではなく癒やした側の者に注意を集める手段」であるからにはイエスが去り，男が重大な関心の対象として残るというのは，奇跡物語の形式にそぐわないことと考えざるを得ないのである。こうし

てマーティンによれば，ヨハネの眼前の資料にある奇跡物語には男の隣人が何らかの形で奇跡の確証（定型要素３）をしていたかも知れないが，ヨハネが仕上げた最終テキストでは，この隣人たちはもとの奇跡物語を閉じる者たちとしてこれに付随するのではなく，むしろそれをドラマとしてさらに展開していく役割を与えられていることになる。この新しい展開部はV8-41に亘るものであり，その特徴としてマーティンがまず記していることは

> V8-41における中心となる登場人物（群）のうち三者は（そのうち二者は集合体であるが）V1-7では何らの役割をも演じていないのである（26）。

そして彼はV1-41の全体を登場人物（群）がどのように転換していくかという観点から眺め，まさに登場人物（群）の組み合わせの違いを指標として，V1-41を以下の「七つの場」へと分節しているのである。彼の表現法のままそれを掲げてみよう。

イエス，彼の弟子たち，盲人	V1-7
盲人とその隣人たち	V8-12
盲人とパリサイ人たち	V13-17
パリサイ人たちと盲人の両親	V18-23
パリサイ人と盲人	V24-34
イエスと盲人	V35-38
イエスとパリサイ人	V39-41

マーティンの慎重な議論の進め方によって第１場と第2-7場との表現内容の相違を指摘する準備が鮮やかに完成された訳である。それぞれの場が「イエスの時」と「ヨハネの時」を二重に表現しているとはいえ，第１場は明らかに「イエスの時」の方に重心が置かれていて，残りの場は逆となっていることは明らかである。その分岐点となるV8-9の特徴を述べるに当たってマーティンはThey cleary begin *a new scene* in which *Jesus is no longer present*. (25) というすばらしい表現を得たが，言い得て妙，彼自身も当分興奮がおさまらない底の快哉を叫んだことだろうと思われる。われわれはマーティンの分析に多くを学びつつも，まさに「イエスもはや在まさず」の時の盲人の位置づけについて，彼の考え方に重大な疑義を抱かざるを得ないのである。彼は上の刺激的な表現の後（一部は上に引用したが）次のような書き方をしている。

> In them one's attention begins to be focused on the formerly blind man, rather than on Jesus. But in the "normal" form of a miracle story, the sick person "comes into view simply as an object of the miraculous cure...the interest in him ceases once the miracle has been reported" (Bultmann, History, pp.291f) (25)

マーティンは癒やしを受けた者が注目の対象となるか対象からはずれるかというレベルの二分法でしか見ていない（文学社会学が単純な社会学そのものに転換していることの帰結とし

て)。そうではなくてわれわれは，マーティンのいう第2-5場では癒やされた男は明確に主役・主体として振る舞っていると考える。ところでうえに引用されたブルトマンの本文での該当個所では，〈通常の奇跡物語では癒やしを受ける者の内的精神状態は考慮されずただ治療の対象・客体としてしか見られていない，だから治療が終われば患者への関心が消えてしまう〉という議論が進められているのである。この文脈から上のような引用をしてしまうならば，次のような意味となってしまうだろう――ヨハネの盲人治癒物語においては患者は「通常の」奇跡物語と同様，治癒の過程で客体視されるがそればかりではない，社会復帰後も客体として強い注目に曝され続ける，と。マーティンが無意識のうちにこのような誤謬を犯してしまったのは，彼が「二つのレベルでの証言」，「二つのレベルでのドラマ」というとき，イエスの癒やし行為と，イエスを宣教する者の（精神的なあるいは肉体的な面をも含めた）癒やし行為とを二つのレベルとして無媒介に平行させてしまっているからである。さらにそのことの原因は，彼が二つのレベルの「重ね合わせ doubling」を論ずる際の柱としている文言，

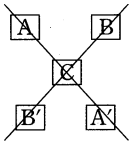
わたしたちはわたしを遣わされた方の業，まだ日のあるうちに行わなければならない。(9,4)

の「わたしを遣わされた方の業」を癒やし行為に一面化した上で，それと重ね合わされた「(ヨハネと）同時代のレベル」の癒やし行為を，テキスト内に指し示さなければならないと考えた点にあると思われる。

しかし，「イエスは世の光であること」を口で証することもまたイエスの自己証言同様，「わたしを遣わされた方の業」なのであり，イエスの癒やしに対応する「同時代のレベル」のドラマは――平行する癒やし行為である必要はなく――癒やされた者の信仰が迫害の中で上昇する物語であってよいのである。

「二つのレベルのドラマ」というマーティンのテーゼを一方で「物語られる時間の二重化」として積極的に受け入れ，他方「同型のドラマの平行」という暗黙の拘束からは解放されて，われわれは9章の全体構成を次のように整理する。

A	しるし $\alpha\alpha$	V1-12
B	盲人の査問 I	V13-17
C	両親の査問	V18-23
B′	盲人の査問 II	V24-34
A′	しるし $\beta\beta$ と裁き	V35-41



Kreuz Chiasmus

「C 両親の査問」の項に十字架交錯配列の交錯部をわれわれが見るのは，体制側からの弾圧に屈

した両親による子殺し（逆の観点からはイエスへ信従し始めた子による親殺し）がこの場所に目撃されるからである（E・シュバイツアーは *Jesus, das Gleichnis Gottes* で「放蕩息子のたとえ」ルカ15,11-32の二人の息子に父親殺しを目撃している33.67)。イエスによる治癒奇跡の物語パターンの「原型」が癒やされた者の「家族と社会への帰還」で終わり，またことば伝承のそれが，イエスの関わった諸個人が「家族的血縁的同胞関係を放棄」する方向に向かうとすれば[8]，ここに語られる「A しるし αα」は治癒奇跡の外観のもとに何か別のものが語られていることを，読者に強烈に印象づけるのである。

確かにこの人は殺されたのである。そして彼は命を賭してイエスを証する者へと生まれ変わったのである。両親の言葉の中に，自分たちの息子の語りを λαλεῖν という動詞で提示している部分がある。それは彼らが「息子の言葉は私どもにまるで異国の言葉であって訳が判りません」と言ったということを意味する。両親は体制側の権力者に圧迫されてわが子を自分の胎内に連れ戻し(ニコデモ対話！)，その内部で彼をこの言葉をもって殺した(理解不可能な異物！)のである。

9:21しかし，どうして今目が見えるのかは，分かりません。

だれが目を開けてくれたのかも，わたしどもは分かりません。

本人にお聞きください。もう大人ですから，自分のことは自分で話すでしょう。

αὐτὸν ἐρωτήσατε, ἡλικίαν ἔχει, αὐτὸς περὶ ἑαυτοῦ λαλήσει.

9:22両親がこう言ったのは，ユダヤ人たちを恐れていたからである。ユダヤ人たちは既に，イエスをメシアであると公に言い表す者がいれば，会堂から追放すると決めていたのである。

イエスが「上げられる道」を歩まれることの予告が7章・8章それぞれに記述されていたが，ここ9章では「C 両親の査問」を承けた後の「B′ 盲人の査問 II」で，まさにイエスを証しする者の「上げられる道」が語られている。そこでは弟子論となっていることが明確に語られていて V27.28，ジャンルそのものも「福音書形式」ではもはやなく「行伝形式」となっている。

ここで審問者「ユダヤ人」は「9:29われわれは神がモーセに語られた λελάληκεν のは知っているが，あの者がどこから来たかは知らない」と語るが，ここに述語 λαλεῖν が出現し，あの両親に殺された人の λαλεῖν と共鳴し合う。神の λαλεῖν と迫害の中の弟子の λαλεῖν，それは読者の記憶の中で，「狼のなかへ羊を放つような」(10章の羊と狼！）弟子派遣を前にしたイエスのあの指示の中に聞こえた，異様に重複された λαλεῖν (拙論『分割』第2章第3節末尾参照)と共に，ある種の恐怖感を伴って幾重にも暗く反響し続けることであろう

マタ 10:19　引き渡されたときは，何をどう言おうかと心配してはならない。

そのときには，言うべきことは教えられる。

マタ 10:20　実は，話すのはあなたがたではなく，あなたがたの中で語ってくださる，父の霊である。

10:19 *ὅταν δὲ παραδῶσιν ὑμᾶς, μὴ μεριμνήσητε πῶς ἢ τί λαλήσητε·*

δοθήσεται γὰρ ὑμῖν ἐν ἐκείνῃ τῇ ὥρᾳ τί λαλήσητε·

10:20 οὐ γὰρ ὑμεῖς ἐστε οἱ λαλοῦντες ἀλλὰ τὸ πνεῦμα τοῦ πατρὸς ὑμῶν τὸ λαλοῦν ἐν ὑμῖν.

(Vgl. マルコ13,11)　　(ヨハネからみれば：ここにパラクレートスの声が響き渡っている)

それと共に読者の心に，弟子派遣が語り出される背景をなしている，地軸が傾くようにして差し迫ってくるあの終末時的暗転への緊張がわき上がってくるだろう。そしてまた，イエスを証する者の「上げられる道」の項点(9,35-38，本小論冒頭，文字 ω の結構における項点のA部)における ὁ λαλῶν はステファノ説教と共鳴しているのである[9]。

第2節

つぎに10章そのものの内部編成に目を向けよう。10章の構成についてはわれわれは何らの組み替えをも施すべきでないと考える。それは次のように区分できる。

A「たとえ」	V1-6
B「たとえ解釈」	V7-21
C「光と闇」	V22-39
D「ヨルダン川の向こうへの還帰」	V40-42

まずD部について述べておく。この段落もまたテキストの前方を強烈に想起させる(Vgl. 1,25-28：3,22-29：4,1-3)。D部が結局テキスト前方のどこと結びつくのかについては議論がある。しかしわれわれの見るところ，そこには重大な見落しがあると思われる。ヨハネはしばしばある術語を提示することによって読者にテキストの前方を想起させるが，そのことによって彼は読者に（広義の）枠構造を発見させるか，その術語にまつわる読者側の様々な思いなど（フレーム）を喚起するかであってテキストのある箇所を単純に指示しているのでは決してないということである。ここでは「ヨルダン川の向こう」というこの言葉で読者が何を想起するかが最も重要なのであり，想起の内容によって9-10章の内容は深くも浅くもなり，その意味する射程も大きく変わる。この観点から言えば，テキストが外へどのように開かれていくかは読む者の側に委ねられているのである。そもそも物語のこの段階で洗礼者ヨハネへの言及がなされているということそのことに出会ったとき，読者はやはり…という思いで（9-10章が見える・聞こえるを強力に結合していることなど様々な点から),洗礼者ヨハネからの使いに向かってイエスが晴れ晴れと語られた言葉（マタイ11,2以下，ルカ7,19以下）を，改めて鮮明に思い出すにちがいない。このようにしてヨハネの語りはイエスの業の総集約をこのクライマックスにおいて行った後，全面対決と両者の没落の叙述へと向かうのである。

次にC「光と闇」の段落について。ここでは，光の啓示として「父と子の一致 Übereisnstimmung」が示されているが，その啓示は C_1「〈下からのアナロギア〉による方式」(V22-31) と C_2「〈相互内在〉による方式」(V32-39) との二つの形式においてなされるのである。これは「下からの光」としての預言者ヨハネの〈証の言葉〉と，「上からの光」としてのイエスの〈父からの言葉〉とが平行して叙述されてきたことの，最後の完成形態である（1,39-28〃1,29-34；3,11-21〃3,22-36；5,19-29〃5,30-39 小単位の平行としては1,1-9；1,14-15；8,12-20)。光が啓

示されるいずれの方式に対しても，――「悪を行う者は皆，光を憎み」というふうに書かれていた3,19-21ように――「ユダヤ人たち」は〈闇〉としてイエスの言葉の前に立ちはだかりイエスを脅かすのである（V31.39)。

因みに段落Cは「神殿奉献記念祭」を背景にして展開されているが，この祭りの別名は「光の祭り」であり，そのことは，「世の光」イエスが「盲人として生まれた人」に光を恵与した奇跡から始まるこの物語を終結するのに，まことにふさわしい。しかし「神殿奉献」ということでテキストが読者の想像力を誘発する次元はその奥の深部にあるのではないかと思われる。すでにカナでの「第一のしるし」の後，〈この出来事のエルサレムへの破壊的な反響〉として，イエスの手による宮潔め事件とイエスの復活した身体が新しい神殿であることの告知があった。「神殿奉献記念祭」のモチーフはそれと同種の，〈盲人の癒やしという業の，神殿本体への破壊的な反響〉というものを，想像させるのである。ここでは「盲人として生まれた者」が「命を賭してイエスを証する者」となったのであるが，彼のこの再生の根底を支えるものとして，イエス運動側からの「神殿奉献」が暗示されているのではないかと思わされる。つまり「闇」に脅かされた「世の光」としてのイエスの「身体」の解体と再生が旧神殿の廃墟の上に出来するという方向での読みが促されているのではないかと思われる。その上層ではイエスの死への歩みに同行するようどこまでも要求するテキストは，象徴次元では，イエス運動側の「光の祭り」の慶びを爆発させていると解するなら，それは8章末尾の物語構造と鮮明に平行していることとなる（8章末尾においてわれわれは，拙論『セオーレイン』では「始元を知る慶び」を焦点にして，同『Joh 8,52-53』ではイエスの死と，そしてそれに結び合わされた「信じているつもりの者の死」を implizit な焦点として分析したのである)。

---

[1] 火口部Bの存在によってA'部の λαλεῖν10,6がA部の λαλεῖν9,37と切断されていることは，おそらく決定的に重要なことを告げているのだ思われる。イエスの言葉という光は闇を闇として増幅させるが，その膨満が自分自身の内部において破裂したことを感受する者のみがこの光に捉えられるのであり，この者のみがあの光と闇の厳しい境界を越えて来られた方によってこの境界を越えて彼方に連れ行かれるのだからである。

このことは術語 λαλεῖν の特徴から見ても肯われることである。もともと λαλεῖν という動詞の語感は，「訳の分からない音を発する」，「音が出せて言葉が話せる」，「日常言語とは際だって異様な語りを語る」というものである（だからヨハネ「福音書」に特殊な術語，「一人称単数現在の λαλεῖν」，つまり「わたしは…とラレインする」は本来ありえない言語形式なのである)。いま，AがBにCというテーマをDの時制で λαλεῖν するとEが語る（提示する）ことを，フルサイズでは，λαλεῖν＝A（B,C,D)；Eと表記することにする。このときBないしEに，疑惑に根ざす何らかの(価値)判断が前提されているのである。語る側Aだけでなく Bないし Eの側の反応という参与をも最初から組み込むことで始めて提示できるという極めて興味深い性格を，（ヨハネが記述する）λαλεῖν という動詞は具えているのである。こうして λαλεῖν という動詞は音の契機を際立たせることによって同時に内容の伝わりにくさをも伝えているのであり，むしろ音が発信された国とそれが受信された国との断層を強調している――〈その内容が聞き取れた〉ということは，語る者とその国とに呼応して，聞く者が存在次元でこれに同調・共振・合致したということに違いない。この動詞のプロトタイプのイメージ・スキーマを次のように描くことが出来る。セッテイングとして出発点 origin と目的地 destination とをそれぞれ含む二つの国があり，語り手（agent）が国境線を越えて音という箱（patient）を聞き手・読者（recipient）に送り，後者はこの箱の蓋を開くことに苦労する，と。なおこのイメージ・スキー

マの打ち続く変換の放射状的な展開として，ヨハネ「福音書」に使用されている λαλεῖν の全用例を解析することは極めて刺激的な課題であるが，われわれは今はそれに携わらない。音が越境したのだということを(事後的に)認知させるという，われわれの動詞 λαλεῖν に具わる非連続という特徴をそのまま視覚的に具現するかのようにしてもまた，上記「頂上部」の叙述では，動詞 λαλεῖν の配置は，A′部が火口部BによってA部と遮断されるという形をとっているのである。

なお認知言語学では，例えば「弧」を定義するとき，語る者・聞く者両者が「円全体」をイメージしていることを前提し，この全体イメージを背景にしてそこから輪郭が浮き上がるようにして，その一部が profile される（言い得て妙！）ものが「弧」であるとする。言うなればわれわれは，9-10章が示すギリシア文字 ω の形状という全体の結構を背景にして，その中央部の山頂で(動詞 λαλεῖν の中に届いて来る)第一位格，第二位格，第三位格の神の声が profile される現場に臨むこと，このことを切に念じているのである。

われわれは認知言語学の更なる発展を願う。近代的自我は「自我の外」を自我から切り離してその面前にその支配対象としてこれを定立する。この自我の生み出す言語観は自我の関与を捨象した客観主義の度を深め続ける以外にない。言語学のこの歴史的趨勢を逆転させようとする認知言語学の志向するところは，「われらが外」の自我への破壊的訪れをまさに profile しようとする聖書学の志向と，重なり合うところがあるはずである。特にヨハネ「福音書」の現在終末論を考察する際には，読者が語り手の物語の中にどのように主体的に巻き込まれ解体され新しい意味地平へと引き上げられるかを読者自身が見据えていくというプロセス，この全体を考察するという構造が出現する。これと類似の考察を Subjektification のタイトルのもとで，Langacker は言語学レベルで可能な限り推進しようとしているのであり（Concept, Image, and Symbol　The Cognitive Basis of Grammer 1990 Mouton de Gruyter 315-342），この主題に関し言語学で可能な射程が知らされれば聖書学がそれとの関係でなせる事柄，なすべき方向がいま一歩明らかとなることだろう。われわれは準備のないままに稚拙な認知言語学〈的な〉分析の初歩的歩みを敢えて開始する。

現代の聖書学はその方法論の大きな転換の過程で，実は言語学の転回をも希求してきていたのではないだろうか。

2 ドッドは「たとえ」の内容そのものを裁きの裁きとみたて，その観点から9-10章を一括し，この単位のタイトルを Judgment By The Light としている。Interpretation 354-362。「たとえ」における羊を盗んだり殺したりする者，また雇い人の羊放棄はエゼキエル34章の内容と平行していること，しかもエゼキエルの叙述は不法な指導者が有罪であることの判決文そのものでもあるとするドッドの論述は教わることが多い。しかしヨハネにおいては，「裁き」とは「聞かないこと」そのものを根幹とする態度でもあるということを考察する余地をわれわれは確保したい。他方，裁きの裁きという考えは，われわれが「ヨハネの鏡」として定式化している相互性という観点からも賛成である。なお，ヨハネ「福音書」の広い意味で物語論的な読解を行う最近の論文に10章をクライマックスとみるものが見受けられるが，ドッドは早くもこの立場に立っている ibid 362。

3 拙論『エイドー』211 Anm.17参照。この小論でわれわれは以下の箇所に「ヨハネ版サンドウイッチ方式」を認めている――4,26-29；11,19-31a；11,31a-35；11,29-31b。

4 拙論『聞く』でも見るように10,22-30においては，イエスの業を読者にとっての「先なるもの」とする〈下からのアナロギア〉が論じられていて，その終結が「父と子の一体」となっている。〈下からのアナロギア〉が可能となる段階とは，地上のイエスの歩みの過程で新しい信仰枠組み(となるべきもの)が人々の生活世界に沈殿してきているに至った時点ということであり，物語時間はそのようにして経過していたのである。

5 6:35イエスは言われた εἶπεν。

「わたしが命のパンである。

わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく，わたしを信じる者は決して渇くことがない。

6:36しかし，前にも言った εἶπεν ように，あなたがたはわたしを見たがそれでもなお信じない

καὶ ἑωράκατέ [με] καὶ οὐ πιστεύετε.。

6:37父がわたしにお与えになる人は皆，わたしのところに来る。

わたしのもとに来る人を，わたしは決して追い出さない。

6:38わたしが天から降って来たのは，自分の意志をではなく，

わたしをお遣わしになった方の意志を行うためである。

6:39わたしをお遣わしになった方の意志とは，

わたしに与えてくださった人を皆 πᾶν ὃ δέδωκέν μοι

一人も失わないで，

終わりの日に復活させることである。

6:40わたしの父の意志とは，

子を見て彼を信じる者が皆 πᾶς ὁ θεωρῶν τὸν υἱὸν καὶ πιστεύων εἰς αὐτὸν

永遠の命を得ることであり，

わたしがその人を終わりの日に復活させることだからである。」

ABB′CDD′という，緊密な平行形式に注目のこと（各行が始まる高さとその内容の対応関係に注意）。
DD′部に未来終末論が鮮明に提示されている。

因みにトマス物語の最後のイエスの言葉は

20,29わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は，幸いである。

20,29 Ὅτι ἑώρακάς με πίστευκας; μακάριοι οἱ μὴ ἰδόντες καὶ πιστεύσαντες.

θηωρέω は見える／見えないの狭間に「反省的」判断をともなって「見る」，εἶδω は現実に感性的に「在る」ものを感性において「見る」（トマスの言辞はこの意義を踏まえた〈信仰の条件要求型のεἶδω〉），ὁράω は未来形は未来終末論を継承包含する用法だが，現在完了形は（直接経験がεἶδω，θηωρέω のいずれによるにせよ）〈イエスまたは神をその両者の一致の相において見た〉というレベルの内容をもち，告白・証言として提示される。このようにわれわれは三者を拙論『セオーレイン』に要約した（144-145Anm11.12.13)。

6 逆にこの物語が終結するとは，上の順序を逆転して，1］未来終末論2］未来終末論＋現在終末論3］現在終末論となると考えられる。原理的には，10章の「父と子の一体」，「父と子の相互内在」は現在終末論そのものでなければならない。ただ全篇のストーリーとしてはそれは未完である。11,24は未来終末論の最後の固執であるが，12,48は未来終末論の外観のもとでの現在終末論である。

7 Martin J: History and Theology in the Fourth Gospel Revised and Enlarged Abingdon ²1979
邦訳：J・ルイス・マーティン著／原　義雄・川島貞雄訳：『ヨハネ福音書の歴史と神学』　日本基督教団出版局　1984

8 大貫　隆『文学社会学』　270ff

9 ヨハネ「福音書」10章をめぐる研究についての国際コングレス（ノルウエーのトロントハイムで1985年に，アメリカのアトランタで1986年に開催された）での発表論文をまとめた報告書 *The Shepherd Discourse of 10 and its Context: Studies by Members of the Johannine Writers Seminar : edited with introduction by Johannes Beutler and Robert T. Fortna Cambridge University Press 1991* で編者たちは，この二年間の発表論文がテキストの形成過程に着目するものからテキストをまとまった全体として考察するものへと大きく転換したが，それは当初の判断に反して，偶然的な事態ではないことがはっきりしてきたと述べている。そしてその後に次のように記している，「ほんの二，三年前まではほとんどの学者はヨハネ福音書が共観福音書に依存していないと了解していた。しかしこのようなコンセンサスがもはや当然視されえなくなったことは意義深いことである」(3) と。H.Thyen の論文はこの点を力を込めて論じている。M.Sabbe の論文にいたっては，自分たちは「共観福音書への直接依存仮説」に基づき既に他の種々のペリコーペについての実りある研究成果をえたが，ヨハネ「福音書」10章についても同様な成果を期待していると語って，依存云々の問題についてほとんど議論せずに，直ちに John 10 and its relationship to the synoptic gospels という論題の下での実質的な記述を開始している。われわれは様式史，編集史の研究史がなかったかのように依存関係を対置するのではない。読者論を踏まえることだけでも決定的な前進がある。当時の地中海文化の圧倒的な伝播力・相互影響の揺籃の中で最初の半世紀間のイエス運動を担った民衆のエネルギーが，言われてきたような閉鎖的な情報の孤島のなかに閉じこもっていたはずがないとわれわれは考える。共観福音書はおろか他の福音書文学，書簡文学，行伝文学を貪欲にしかも相当精確に知り伝えていく民衆の爆発的な運動に揺さぶられながら，この運動の枠をなす共通認識を容認しつつそれを転倒して未形成だった真理の契機を新しい枠組みのうちで発展させようとするもの，それがヨハネ「福音書」テキストの根本性格であるとわれわれは考えるのである。従来のヨハネ「福音書」の研究がこのテキストに独自なものをいささか純粋培養的に抽出してきたお陰で，読者の常識のどのような根基とヨハネが肯定的否定的に媒介を深めようとしたのかが解析しうる可能性が与えられているともいえるのである。